

ぶなの森

社会福祉法人 常成福祉社会



Vol. 100

2024 年 10 月号

発行：社会福祉法人常成福祉社会
丹沢自律生活センター

発行責任者：伊藤崇博

印刷：秦野ワークセンター

おかげさまで

100号

INDEX

P2.3 Special 対談

P4 ハンディキャブの会

P5 常成の good points

P6 丹沢写真館～施設紹介～

P7 ぶなの森の歴史／ふくころ誕生秘話

P8 ギラッとひかるひとたち



水無瀬通り「三屋方面入口」の看板を北に曲がり、約180m 先の右側です。

【移転する事業所】

- 丹沢自律生活センター総合相談室
- ライツはだの
- 花鳥地域生活支援センター
- ときの家
- あじさい

【移転予定日】：令和7年4月1日（建設工期により遅れる可能性があります）

ぶなの森 100 号記念対談
これから地域に根差した運営を



みなせ拠点では、既存施設の集約のほか、就労継続支援B型事業所としての飲食店開業も予定しており、地域の方に気軽に来てもらえる事業所を目指しています。飲食店の経営は初めてのチャレンジになります。が、就労支援の専門性を高めることで地域に貢献していこうということです。

藤村：いずれにしても、今後は「ぼだい」と「みなせ」の2拠点で運営していくことになります。事業を動かしていくのが職員の皆さんの役割になります。

伊藤：最後に職員へのメッセージを

藤村：事業としては、まだどこもやっていないかった相談事業をいち早くスタートさせた点が強みでした。今回の計画で相談事業所が1つにまとまる訳ですが、その点はとても良かったと思うし、これからどのように地域に貢献していくかだと思います。

伊藤：これからの話が出たところで、本題の第五次施設整備計画についてお願いします。

藤村：予てより経営上の課題として、職員の確保が難しくなっているとい

常成福祉会では、第5次施設整備計画に基づき、「みなせ拠点」の整備を進めています。市内に点在する事業所を集約することで事業の効率化を図るとともに、新たな就労支援の事業も計画。菩提拠点と「みなせ拠点」の2拠点体制の整備を進め、さらなる地域福祉の推進を目指します。

伊藤…本題に入る前に、少し法人設立当初のことを聞かせて下さい。

藤村…35年前は施設福祉が中心でした。その中で一番福祉サービスが行き届いていなかったのが重度の身体障害者施設。特に県西部にはほとんど無い状態でしたので、回復期のリハ入院の後も、ずっと病院に居なければならぬ状況でした。そこで、県西部に身体障害者施設を作りたいと考え、法人設立に至ったという経緯があります。

伊藤…施設開所時の入所定員は50人でした。その後、56名+短期4名の60名定員になった訳ですが、当

時は待機者が多かった。セーフティネットの役割を果たしていくところに意味があったと思います。

藤村…思い出深いエピソードとしては、同性介助の問題があります。この施設も完全な同性介助が当たり前だった中で、敢えて男性に対してだけは同性介助としなかった(※)のは、地域におけるヘルパーの大半が女性だからです。色々批判を受けましたが、当時から施設入所者の地域移行を念頭に入れて支援していきたいと考えていました。(※女性利用者に対しては還俗同性介助)

伊藤…他の施設に先駆けて居住者の自治会も作りましたね。初めて介護リフトを導入した際は、「人を物の様に扱うな」と猛反発を受けて大変でした(笑)

う点がありました。少子化の中で福祉系の専門学校の学生は年々減り、人材が確保できない。そうした中でコロナ禍を経験し、事業所の集約を進めたいという思いを強くしました。コロナ禍での事業所運営は、利用者が平時以上にお休みすることによって、忙しい事業所とそうでない事業所を生みました。それなのにそれぞれの事業所の場所が離れているためサポートに入れない。人材が確保できない上に、効率的な人員配置もできない、という状況です。事業所が点在していることで目が届きにくいという面もあるし、もっと職員に効率的に働いてもらえる環境を作る必要がある。そんな思いから、第五次施設整備計画の中で集約を進めたいという考えに至りました。

伊藤…集約した新たな拠点は、「みなせ」という名称に決まりました。この

お願いします。

藤村…法人の職員はみんな良くやっているといます。35年もの間、設立時の考え方を大切にしながらやってこられたことは素晴らしいし、これからも時代に合わない部分は変えながら、良い所を残していつて欲しい。手広く事業を拡大していくことを目指すのではなく、地域に密着し、地域に根差しながら運営して欲しいです。事業的には小規模多機能。できるだけ複合的な形で利用できるように。

伊藤…私も長く働かせてもらっていますが、感動したことが沢山ありましたし、そうした長い積み重ねの中で常成福祉会に積み上げられてきたものが沢山あると思います。職員の皆さんもそうだと思いますが、法人と一緒に自分自身も成長してきた、という感じですね。本日はありがとうございました。



障害者の自由な移動をすすめるハンディキャブの会



38 年間ありがとう！



昭和 61 年から活動されているボランティア団体「ハンディキャブの会」が、令和 6 年 3 月をもって長い活動の歴史に幕を閉じられました。広く地域の車椅子利用者の「移動」を支援してこられた同会。当法人においても、入所・通所を問わず沢山の方が加入し、大変お世話になってまいりました。

38 年間の活動に一区切りをつけられた、代表の府川さんご夫妻にお話を伺いました。

頸髄損傷者連絡会で福祉車両の貸出管理を担当させてもらっていました。そうした中で、病院や地域の人から福祉車両を使いたいという希望が増えたため、もっと広く車椅子の方が利用できる形にしようということでの会の設立に至りました。立ち上げには市や市社協の方々など、沢山の人の協力がありましたし、24 時間テレビで福祉車両の寄贈を受けられたのも大きかったと思います。

車の維持費などの経費は会員の会費や寄付、市民の日の売り上げ等で賄います。市民の日はやきそばやお汁粉を、学生ボラやその他のボラさんと一緒に売るのが定番だったのですが、売り切ったために大声で呼び込むなど、皆真剣でした。そうやって懸命に捻出したお金でハンディキャブ（車椅子のまま乗車できるリフト付自動車）を維持し、ボランティアの運転手さんを探して運行する。ボランティア募集はタウンニュースに広告を出したりもしていました。

平成 23 年、会創立 25 周年の時に緑綬褒章（褒状）を受章しました。秦野市からも市



法人から感謝の花束をお送りしました

民功労表彰を受け、会員やボランティア、関係者の方々と「祝う会」を開催できたことは、とても嬉しかったし励みになりました。

会の運営に関しては、ボランティアさんへの感謝の気持ちで一杯です。特に小林さんには本当にお世話になり、年間 180 件もの依頼に対応して頂いたこともありました。定年退職後、20 年以上活動して頂いた小林さん。小林さんがいなくなったら、間違いなくここまで長く続けることは出来なかったと思います。

私は 10 代の終わり頃に交通事故で障害を負ったのですが、その頃、私の様な重度の身体障害者が入れる施設はありませんでした。そんな中で丹沢レジデンシャルホームが開所（平成 2 年）し、

おつかれ さまでした！



どれだけ心強かったか。だからという訳ではありませんが、施設も地域の一部だし、在宅の人も施設に入所されている方も、希望があれば特に分け隔てなく会員として迎ええし、一緒に活動しました。

会の終了は、車両の老朽化や維持費の高騰、ボランティアさんの高齢化等々の状況を勘案して決めました。長い間ありがとうございました。



緑綬褒章の授与式にて



市民の日の出店



緑綬褒章受章を祝う会（北公民館にて）



The good points

居住者・利用者みなさまに
施設・事業所の良いところ、好きなところを
伺ってみました♪

- ☞ 花や野菜を育てるのに環境が良いです。
- ☞ 買い物や外食に行けるサービスがあるのがうれしい。
- ☞ 景色が良いです。デイの活動室からは大島も見えます。
- ☞ カラオケが楽しみ。スポーツクラブも好き。
- ☞ とにかくご飯が美味しいです。
- ☞ みんなが明るくて話しやすいです。
- ☞ ワークセンターは楽しく仕事ができます。





写真左：機器そのものの選定はもちろん、机周りをご本人が使いやすいように様々な工夫が施してあります。特に机の高さや出幅などは重要なので、DIYが欠かせません。／写真右下：どうやってキーを操作するか。これもまた超個別的なもの。ご本人の「使いやすさ」がすべてなので、自助具を手作りすることも多くあります。

ICTが広げてくれた世界

今から30年以上前。開設当時の丹沢レジデンシャルホームは、制度上「身体障害者療護施設」という種別の施設でした（現在は「障害者支援施設」といいます）。その名の通り身体障害の方のための生活施設として開設された訳ですが、時代背景的にインターネットの普及と時期を同じくしていたところがあり、居住者さんの暮らしにもいち早くパソコンが取り入れられていきました。重度の身体障害があっても、パソコンを通じて社会と繋がったり、発信したりすることが出来る時代。頸椎損傷や筋ジストロフィーといった難病の方にとって、ITの普及は革命的なことだったと言っても過言ではないでしょう。そこで活躍したのが、この「コミュニケーションルーム」です。

もちろん個々の居室にそうした環境を作れば、それに越したことはなかったのですが、個室といってもそこまで居室は広くありませんし、機器の操作や微調整といった手伝いを全て個々の居室から呼ばれていたら、おそらく職員側も対応しきれなかったと思います。いずれにしてもこのコミュニケーションルームは居住者さんの社会活動の場として大変重要な場となりましたし、社会参加の形そのものが一気に多様化していった時期とも言えます。（ちなみに施設職員の多くはこのコミュニケーションルームを利用されている居住者さんからパソコン操作を教わっておりました）

昨今はスマホ全盛ですが、指が動かせない方にとって小さな端末は必ずしも使い勝手の良い物ではないため、まだまだコミュニケーションルームの重要性は高く、大事な場所となっています。居室からは渡り廊下を渡ってしか行けない不便さがありますが、その移動が住まいと職場を分けているようなところもあり、良い切り換えとなっている、と仰る居住者さんもいらっしゃいます。

丹沢写真館

普段あまり見ることのできないスポットを写真で紹介し、ピンポイントで深掘りするコーナーです。

VOL1: **コミュニケーションルーム**

広報誌“ぶなの森”の歴史

100号を迎えた“ぶなの森”。現在、作成は広報委員会が行っていますが、創刊から15年以上の間は、総務担当の古谷久志さんがほぼ1人で編集を担っていました。今回100号を迎えるにあたり、古谷さんに“ぶなの森”への想いと歴史を伺いました。



第1号はA3モノクロでした

創刊号はどんな内容？
編集は全部独学でしたね。地域の掲示板に貼ってもらえるよう、縦のA3サイズで作成していました。モノクロ印刷しか出来なかったのですが、写真が載せられず、委員がイラストを描いたりしていました。そもそも情報公開が主目的だったので、現在の誌面内容とは大分違う面が

「ぶなの森」の由来は？
当時丹沢山地ではブナの立ち枯れが深刻化していたため、「ブナ林を再生しよう！」という市民活動がありました。そうした取り組みと、私たちの法人が目指している地域福祉の推進というテーマにマッチする部分があるという思いから、「ぶなの森」と名付けられたと記憶しています。発行の翌年には植樹祭が行われ、施設正門前と裏庭に、合わせて50本の苗木が植樹されました。

創刊の経緯は…？
平成18年に法改正があり、情報公開が義務付けられました。事業計画や事業報告などを公開するため、編集委員会（現在の広報委員会）が立ち上がり、ぶなの森が誕生した経緯があります。

あると思います。

印象深い出来事は？

カラー印刷機が導入された最初の号ですね。カラーになったことで、各事業所の外出行事などの写真が掲載出来るようになり、居住者さん・利用者さんの笑顔の写真を載せられるようになりました。またこのタイミングで、掲示板に貼ってもらったA3サイズの縦型から、フাইルなどに閉じやすい、右開きの冊子スタイルへ進化しました。

現在のぶなの森はどう？
現在の「ぶなの森」はとても誌面が華やかで広報委員の頑張りが伝わってきます。編集作業の大変さは良く分かるので、いつも応援しています。



古谷久志さん。平成9年入職。総務・財務担当のマネージャーとして、長年法人を支えてくれています。

ふくころ誕生秘話

法人のマスコットキャラクター

「ふくころ」誕生！

法人のイメージキャラクターをデザインしてもらえませんか？ そんな相談を（株）オフィスベースの武さんに持ち掛けたのが始まりでした。令和2年に30周年を迎えた当法人。その30周年記念誌の中にオリジナルキャラクターを登場させ、ブランドینگとして活用・展開していきたい。そうして誕生したのが、この「ふくころ」です。

当初のリクエストのイメージは

「何か丹沢の森にちなんだキャラクターを…」という極めて漠然としたものだったため、デザインを形にしていくな作業はとても大変だっただろうと思います。



「丹沢の森の妖精みたいな…」

「あまり子どもっぽくなくて、でも可愛い感じに…」 具体性の無いリクエストを次々とぶつける私たちに、武さんは優しく「考えてみましょう」と微笑んでくれたのでした。

ようやく「フクロウ」というモチーフにたどり着き、デザインは一気に形となります。こだわったのはオリジナリティ。良い感じの不思議キャラクターも含めつつ、最後は広報委員の瀬戸女史（相談支援担当）による「もっと目が可愛くないとダメ！」という一声を経て、完成に至りました。

キャラクター名は法人内で懸賞付きの募集を行いました。沢山の応募の中から最終的に選ばれたのが、この「ふくころ」。藤村理事長の著作である「福祉のこころ」

（ふく）のこころに因んだ名前ということ、原点回帰を想起させるとても良い名前となりました。こうして誕生した法人のオリジナルキャラクター「ふくころ」。今回、ぶなの森100号記念の企画として、知られざる誕生秘話を記しておくこととなった次第です。

（広報委員会）

これからも
よろしくお願いします



キャラ名の選考結果を掲示で発表した際の様子

常成福祉会の キラッと光る ひとたち (特別編)

100号記念特別版として、「キラッと」ならぬキラッと光るひとたちをご紹介します。※「キラッと」とは…キラキラではなく、いぶし銀の存在という意味。



テーマは 次世代へのバトンタッチ



従来、福祉施設の人材育成は、入所施設の3交代勤務で経験を積み、その後、通所や相談支援事業といった部署へ異動をして幅を広げていく、という流れが一般的でした（一概には言えませんが）。

しかし、昨今はそうしたスタンダードがむしろごく少数となり、夜勤のある交代勤務は若い人に特に敬遠されるようになってきているようです。そうすると、前述した人材育成の流れがそもそも成立しない訳です。すから、別のシステムを模索していかざるを得ません。これは、いわゆるメンバーシップ型雇用からジョブ型雇用への転換期、とも言えるでしょう。

そんな小難しい話とはかく、私たち現場の職員は、いかにしてこの仕事のやりがいや面白さを伝え、若い人に来てもらおうかを日々考えています。本誌「ぶなの森」の目的も、究極的には人材確保。少しでも「この施設で働いてみたい」と選んでもらえるように、自分達の強み、アピールポイントを必死に探しております。

上の写真は、法人の各部長と、それぞれの事業所長、担当マネージャーです。気が付けば大半がアラフイフ・アラカンとなっており、世代交代が必要不可欠な状況…（笑）。どうしたら若い世代にバトンタッチしていけるのか。これからも走りながら考え続けていく必要があります。



社会福祉法人 常成福祉会

〒259-1302 神奈川県秦野市菩提 1711-2

TEL : 0463-75-3300

FAX : 0463-75-3377

HP : <https://jousei.or.jp>

E-mail : tanzawa@jousei.or.jp



QRコードは
こちらから

秦野ワークセンターからのお知らせ

秋の出店シーズンが始まりました。まきの木まつりや市民の日などの秦野市内のイベントを中心に出店をしています。近くにお越しの際はお気軽にお立ち寄りください。詳しくはホームページまたは下記のお電話でお問い合わせください。

☎ 0463-75-3343